



武井暁子, 要田圭治, 田中孝信共編
『ヴィクトリア朝の都市化と放浪者たち』

Akiko TAKEI, Keiji KANAMEDA &
Takanobu TANAKA eds.

Urbanization and Vagrants in the Victorian Age

(288 頁, 音羽書房鶴見書店,

2013 年 9 月, 本体価格 3,000 円)

ISBN: 9784755302749

(評) 金子幸男
Yukio KANEKO

本書は, 2011 年 5 月開催の日本英文学会のシンポジウム「ヴィクトリア朝イギリスの都市化と放浪者」において発表された 4 名の論文をもとに, さらに 3 名の論文を加えてできあがったものである。本書は, 産業革命や農業革命の影響を受けて生じた都市化と放浪者たちに焦点をあてて様々な角度から論じたものである。どの論文も力作で, 一冊の本を一つの論文に押し込めた感がするほど濃密である。図版や参考文献リストも充実している。相当な情報量なので, これをまとめるのは大変な仕事であるが, 以下, 章ごとに要約した上でコメントを加えてみたい。

特別寄稿論文「ルールが伝える怪物の引っ張り力」(小池滋)

小池氏は, 都市化に大きく寄与した鉄道の姿を, 田舎の鉄道駅の広告(ロンドンへのお誘い)に引きつけられる若い農夫の男女を描いた『パンチ』の漫画に読みとる。さらに都市と故郷を結んでくれる感謝すべき鉄道のユーストン駅にいて, 里帰りもかなわず同郷人に話しかけることもできぬ孤独なアイルランド移民の, 鉄道への複雑な思いを詠った, アイルランド女性詩人, キャサリン・タイナンの詩を紹介する。

序章「産業革命の大いなる遺産と自由への渴望」(武井暁子)

武井氏は, 都市化と放浪者たちの背景となる社会史を簡潔にまとめている。産業革命による工業化は近代化(鉄道)と都市化(人口分布の変化)を伴い, 1840 年代までにロンドンのイースト・エンドにはスラムが形成される。貧困と病気の関係が認められ, 衛生状態の改善がなされ, 清潔と節制が奨励される。この頃の放浪者に対する警戒心の根底には, 勤勉を尊ぶスマイルズの労働観がある。文学に

おける放浪／放浪者は、世間の因習に囚われない自由人として憧れの対象だった。この書物は英米および旧英植民地を対象とし、ヴィクトリア朝の都市化を包括的な視点でとらえ、「都市化の結果、放浪を余儀なくされた人間、自らの意志で放浪する人間が内包する問題を文化・社会的視点から分析し、人間が生来持つ自由への願望を明らかにする」ことにより、ヴィクトリア朝を従来とは違った観点から読みとく試みである。

第1章「都市、生者たちのネットワーク」(要田圭治)

要田氏は、フォーコーの「生権力」の概念を用い、近代社会において個人に加え人口にも焦点が当てられていったことを法律や、痛みに対する感性という点から説明し、同時にその生権力を執行する法体系の危うさをも指摘する。

最初の3節では、解剖学が生権力を発揮したことを説明する。誕生と死を記録し対象化した「登録法」(1836)、解剖屍体を無縁者の遺体に限定し、殺害された遺体や墓の死体を拒否する「解剖法」(1832)と、その中の1条項である「殺人法」(1752)(処刑された殺人犯の屍体を利用)の撤廃とは、殺人犯の死体解剖と無縁者の解剖との間に区別をつけた点で、死の権力から生の権力への移行を示しているという。

次節では1830年代、40年代の死の権力から生の権力への移行を、J.S.ミルを援用しながらスペクタクルと痛みに対する感性の変化として語る。死の権力では公開処刑はスペクタクル化し、被処刑者の痛みを観衆は直接的に経験する。ところが、直接的な痛みを知るのが裁判官や外科医のみの時代になると、彼らの言説を通じてのみ痛みや死が間接的に知られる、生の権力の時代になったという。ただ、この点については文化史的に19世紀が痛みに対する感受性が敏感になっていったこと、動物愛護協会の誕生などと矛盾しないかどうか。直接的に痛みを感じるスペクタクルの段階ではなく間接的に知る段階になって、なぜ逆に痛みに対する感受性が強くなっていったのだろうかという疑問がわく。

「法とテキスト」という節では、サイクスの死と痛みのスペクタクルに死の権力の行使を見る『オリヴァー・トゥイスト』(1837-39)と、相続の混乱の中で生かされる者も「死の中に遺棄される」浮浪者ジョーも生権力の表現とみる『荒涼館』(1852-53)が論じられる。次節「都市を表象する」では、個人に及ぶ規律権力である解剖-政治学(ウィリアム・ハーヴェイの血液循環説)と人口に関わる生-政治学(ウィリアム・ベティの人口の統計処理による国力の可視化)の2側面が17世紀後半から19世紀にみられたという。イギリスのコレラ予防法の推移がそうである。最後に、生権力の担い手である法体系の危うさを説明する。登録法の外にあって生権力の及ばない『荒涼館』のスラム、法維持と法指定の権力の

境界が曖昧なゆえに是認される警察の暴力、コレラ対策を枢密院にゆだね法律の支配が不可視の領域に入った点にその危うさを見る。

要田氏の論文はフォーコーの理論に、同時代のサウスウッド・スミスの一次資料を用いている点など理論と資料のバランス感覚がよい。また、生権力が個人だけでなく人口のレベルでも考えられるようになった点を、社会全体の民主化の動きと連動させて考えてみることもでき面白い論文であった。一つ難点を言わせてもらおうと言ひ回しが少し難しいところである。

第2章 「自由の国」での不自由な旅人：ディケンズの訪米体験再考」(松本靖彦)

松本氏は、1842年1月～7月のアメリカ旅行の体験記『アメリカ紀行』(1842)について、ディケンズが自由の国で知った不自由な状況、すなわち障害者、監獄の囚人、彼の名声に関わるもの、国際著作権の不在について、彼の小説を援用しながら論じてゆく。

まず、光と音のない世界に監禁されていたボストンの盲学校生とフィラデルフィアの監獄の独房の囚人との間にディケンズは類似を見出す。独房は、想像力や精神を破壊し、幻想と亡霊の世界を導きいれ、人間を狂気という監獄の囚人とする。「憑かれた男」やフェイギンが好例だ。ディケンズはまたアメリカでは自己所有権がなかった。名士ゆえに自由やプライバシーがなく見世物扱いされたのだ。また英米間に国際著作権協定がなく無断に海賊版を作られ利益を持っていた。「自分自身が自己の主人である」かどうかという問題は後に『大いなる遺産』でピップが遭遇する問題でもある。

ディケンズにとって、この世もわが身も監獄であったのだが、帰国後始めた公開朗読はこのような不自由さから逃れ、自己の著者性を再確認できる機会であった。と同時に、複数のキャラクターに自己を分裂させることで、群集の中に没入したいというディケンズの思い、都市放浪者の思いにもつながっていくのであると言う。

松本氏の論文は旅するディケンズの紀行文を扱ったものだが、そこには、自由を奪われた旅行者から、自由を満喫できる放浪者へと変化していくディケンズの姿が見えてきて興味深い。

第3章 「産業都市マンチェスターと急進主義者トムの系譜」(閑田朋子)

まず閑田氏は、マンチェスター・フィクションを、産業革命により登場した産業都市マンチェスターを舞台または下敷きとする、「1820年代からヴィクトリア朝中期にかけて執筆・出版されたフィクションの総体である」と定義する。その後、ヴィクトリア朝社会問題小説の源流であるハナ・モア、マンチェスターを舞

台にしたハリエット・マーティノー、1830年代の改正危機時代、「戦うプロテスタント」と呼ばれたシャーロット・エリザベス・トナの作品の系譜を追っていく。

モアが書いた『村の政治——英国における全ての機械工、職人そして労働者にあてて』(1792)は、革命時代の村に現れた過激な思想の批判。1820年代、マンチェスター・フィクションが顕在化、マーティノーは『暴徒たち——または不況の時期の物語』(1827)、『ストライキ——または忍耐が最上の策』(1829)を、トナは『団結——事実に基づいた話』(1832)を出版。マーティノーもトナも暴動、ストライキを批判した。モアからトナまで、作品形式も問答式の短い対話からプロットを持つ小説に移り変わり、成熟した社会問題小説が出現する。急進主義者の系譜の人物たちは破滅の淵へ向かってしまうが、ギヤスケルに至り破滅の裁きから罪の許しへという動きがみられる。

社会問題小説誕生に至る経緯が、マンチェスター・フィクションという概念を使って見事に語られているが、保守主義者の考え方は、19世紀のネーション拡大過程において、労働者階級を取りこむことに対する抵抗とも読めて興味深かった。

第4章「崩壊するウェセックス：ハーディ作品における農業不況と流浪の民」 (武井暁子)

武井氏は、イングランド南西部の田舎ドーセット州と同エリアをモデルにした架空の地方ウェセックスで起こる「都市化／近代化と労働者の移動」をテーマとする。

ハーディの作品では、農業が中心的地位を失い、労働者は定住から移動の生活へと移行し、農業共同体は衰退していきつつある。そのダイナミズムを当時の農業革命や経済情勢とともに見て行くことで、「ウェセックスと都市化、人口の流動化の問題の本質」に迫って行くのが本論文の流れである。

氏は18世紀初めから19世紀にかけて農業革命が進んだが、天候による「不安定な農業経営」とそれに対する挑戦は続くと言い、『カスターブリッジの市長』や『はるか群衆を離れて』にその様子を見る。次に「近代資本社会への転換」が農業にも起こっていることを、『市長』の中に追ってゆく。カスターブリッジでは、ヘンチャードとファーフリーが生産と売買だけではなく、穀物投機による利潤獲得をめぐる争いをしている点に農業の資本主義化を見て取る。さらに「農業共同体の崩壊と人口流出」を1870年代からの農業不況を描いている『テス』の中にみてゆく。農業不況は移動と農村共同体の崩壊をもたらした。移動は、たとえば『森林地の人々』(1886-87)と『テス』に見られる借地権の短期化等による。

最後にウェセックスの変貌が示すのは、近代化／文明化の途上にあつて、ヘン

チャードやテスのような「居場所を奪われ孤立」した人間を描くことで、「労働者と土地は不即不離の関係」にあることであったと武井氏は言う。

この論文では、ウェセックスの下になった現実の地域をドーセットに限っているが、実際にはウェセックスはその周辺の州をもカバーしているので、ドーセットを中心とするイングランド南西部という言い方のほうがよかったのではないかと、また、土地と人間の結びつきに対する氏の結論は、時代的にすぐ後にくる“Back to the Land”の動きにもつながってゆくので大変興味深かった。ハーディの主要作品を丁寧に読み解き、一次資料も用いている点なども評価できよう。

第5章「奴隷船に代わる船：19世紀インド人年季契約労働者の、とあるデステイネーション」(梅正行)

梅氏の論文は、トリニダード・トバゴ出身の作家V・S・ナイポールの、祖父から三代にわたる男たちの年代記をエッセイ風にしたものであり、他の論文と違い英国内から離れて英帝国を射程に収めており異色である。氏は「ヴィクトリア朝」はナイポールの祖父の代、「都市化」はロンドンならぬ、ポート・オブ・スペイン、「放浪」はポート・オブ・スペイン、アフリカ・アジア各地、南北アメリカ大陸、イスラム世界と広くとらえている。

ナイポールはインドに出自を持つ自分、両親、祖父母がどのようにしてトリニダードに住むことになったのかを生涯書き続けた作家だった。ナイポールの祖父たちは「インドからトリニダードにいたる「大きな空間」を移動」。これにより、ナイポールは、「徒歩で移動可能な「小さな空間」」、「一日で回れる「ほどほどの空間」、何日もかけて移動する「大きな空間」のそれぞれに実在の人物、あるいは作中人物を配し、移動行為の意味を問い続けさせることになる」と氏は言う。作者および作中人物の移動の特徴は、「大きな空間」を舞台に、宗主国の首都に向かう動き、中心へ到着後は、世界のさまざまな旧植民地に向かうという動きをする。

ナイポールの、母方の祖父の成功譚、記者の父が精神を病んだこと、その父のテーマをナイポール兄弟が追っている様子が氏の作品解説を通じて伝わってくる。氏は『世の習い』を紹介する中で、ポート・オブ・スペインのウッドフォード・スクウェアで年季契約期間が終了後、インドへも帰らず死を迎えるインド人たちに同苦する。

梅氏の論文は、ロンドンだけが都市の放浪ではないという重要な点に気づかせてくれる。ただインドからトリニダードへ大移動する年季契約労働者が重要な語りの要素である以上、序章では言及されなかった大英帝国というより大きな枠組みの中に位置づけて解説して頂けるとさらによかったのではと感じた。

第6章「放浪者への眼差し：その秘められた欲求」(田中孝信)

田中氏は、二枚の救貧院の絵の比較から始まって、文学作品と体験的ルポルタージュに描かれた放浪者へのまなざしが、憐れみや恐怖を伴うだけではなく、抑圧された自由への欲求、放浪者・浮浪者に対するあこがれを投影したものであることを明らかにする。

ファイルズの『救貧院浮浪者収容所の入所希望者たち』(1874)に描かれた女性と子供、老人たちは憐憫の対象であるのに対し、ドレの『ロンドン巡礼』(1872)中、「避難所への入所許可申請」は失業中で労働意欲に疑いのある成年男子に対する社会管理が感じられる絵である。憐れみと社会管理の背後には病氣と犯罪をもたらす浮浪者に対する恐怖心がある。

まず、労働観とジェンダー観から放浪者を眺める。労働に正価値が生じている時代、「救済に値しない者」(働く気のないプロの浮浪者)は取り締まりの対象となり、男性性の欠如、家長不適格、過剰繁殖する動物、人種退化したものという負のレッテルを貼られる。浮浪者は世紀末に性的周縁にいた同性愛者と同じとみなされた。文学作品の放浪者像からは中産階級が因習に囚われない放浪者の自由を渴望したことが分かる。ジェイムズ・グリーンウッドの「救貧院での一夜」は、臨時浮浪者収容所への潜入ルポで放浪者の性生活に触れたもの。ジャック・ロンドンは『どん底』で、イースト・エンドの浮浪者や貧民に同情し体制を批判しつつも、彼らとの身体的差異を通して、怠惰と男色浮浪者とは違う、同性愛を嫌う、家長的な男らしさを強調する。浮浪者像の最終的な神話化はチャップリンに現れている。自由への憧れと都市化批判、それに浮浪者と紳士の境界線の曖昧化である。

大変精緻な分析を加えられた論文で得るところが多かったが、最初の絵の部分を除くここで考えられている浮浪者／放浪者は男性であるようで、女性と子供の放浪者の場合がどうなのかが今一つははっきりとは見えてこない。

本書は、都市化と放浪者について実に包括的かつ詳細に論じられた論文集で、ヴィクトリア朝の社会史・文化史の教科書としても使える貴重な一書である。大きな変化の時代に英国内の都会と田舎だけではなく、国外の大英帝国内の移動にも目を配り、スケールの大きさを感じさせる。今後は、この書物ではあまり比重の多くなかった都市化と女性、女性放浪者の問題について何か語るべきことはないのか、大変興味を持つ。また、都市化とコスモポリタニズム、ツーリズムと放浪の問題なども探求されてよい問題ではなكارうか。各執筆者の今後の研究に期待したい。